



地人館
E-books 17

デモ版 pdf

風雪の旅路
盲目の越後瞽女

最後の瞽女 小林ハル

川野楠己 著



【表紙写真】

86 歳頃のハル

【最後の瞽女 小林ハル】もくじ

まえがき

第一章 越後瞽女唄を聴く会

第二章 胎内やすらぎの家

第三章 瞽女廃業の日

第四章 国立劇場の檜舞台

第五章 赤い瞽女

第六章 一〇〇歳を前にして

第七章 瞽女顕彰碑

第八章 仏の求道者 小林ハル

あとがき

電子書籍のための付記

小林ハル略年譜

まえがき

越後平野の秋。脱穀した残りの藁を焼く煙が夕方気温が下がるとたなびき、時には視界を遮り列車が止まることもあった。田圃の畔に並んで立つはざ木に渡された横棒に刈り取った稲穂を干し、黄色のカーテンが出来たその下で家族総出で脱穀作業が続けられていた。はざ木の列は越後の風物詩でもあった。やがて大型の耕運機を入れるために田圃一枚が広くなり、はざ木の列が消えた。

時代の流れとともに変化する越後平野を車窓から見つめながら、新潟県の北部胎内市の養護盲人ホームに通い始めて半世紀になった。

昭和六一（一九八五）年十一月「私とハルばあさん」（文化庁芸術祭芸術作品文部大臣賞受賞）を制作した後、昭和の終わりとともにNHKを定年になったあと小林ハルさんを追った。

ハルさんが体験した厳しい修行と躰に耐えて生きた人生。ほかに類のない優れた芸域を会得したハルさんの真実の姿を多くの人々に告知しなければならぬ責を私は感じる。

CD『最後の瞽女 小林ハル96歳の絶唱』を自費出版して瞽女小林ハルの存在を訴えた。瞽女

文化を顕彰する会を組織化してハルさんの百歳を祝った、全国から浄財を募り『瞽女顕彰碑』を建立し、ハルさんの労に報いた。だが一〇五歳になった平成一七（二〇〇五）年四月二四日桜が散る中を永眠した。

この取材メモから同年一二月二五日、NHK出版から『最後の瞽女 小林ハルく光を求めた一〇五歳』を刊行した。日経新聞の読書欄や読売新聞の編集手帳欄で紹介されるなど話題を呼び版を重ねた。

また、十年余の歳月をかけて製作され、令和元（二〇一九）年に上映された映画「瞽女 GOZE」（監督・瀧澤正治）の原作にもなった。同映画は上皇后に献上され、ご高覧いただくとともに全国百余か所で上映されベルリン国際映画祭にも出品された。折から開催されたパラリンピック選手の活躍とともに、視覚障害を克服して生きる瞽女の姿は話題を呼んだ。

この度、同書は電子書籍としてよみがえった。改めて視覚障害者が支えた日本の伝統文化の偉大さを読み取っていただきたいと願っている。

「第一章 越後瞽女唄を聴く会」より

井栗村三貫地

小林ハルは、明治三三（一九〇〇）年一月二四日、深い雪が積もった新潟県みなみかんぼろ南蒲原郡井栗村三貫地（現三条市）の農家の末っ子として生まれた。

この年は、一九世紀最後の年というよりも、二〇世紀の曙光が射し込んで新しい時代の幕開けを感じさせる年といえる。

ハルが生まれた井栗村は、当時二六軒しか家がない小さな村だった。生家の小林家は庄屋の格式を持っており広い田畑を小作人に任せ、若衆が何人も下働きをしていた。

きょうだいは四人で、その末っ子だった。一番上が一六歳上の兄、次は上の姉で一二歳、下の姉が六歳年上だった。兄妹たちは元気に育っているのにハルだけが、生後三か月頃から、「しろそこひ」を患い、瞳の奥が白く濁るようになってきた。

これは今でいう白内障で、眼球の水晶体が濁って視力のなくなる病気である。現代ならば手術で濁った水晶体を取り除き、かわりにレンズを眼球内に入れるか眼鏡を使うことによりある程度

の視力を取り戻すことができる。しかし当時の村の生活では、目の病気に気がついても、医師もいないし遠くの医師の所まで通うことは、誰もできなかったであろう。ハルの視力は成長するにつれて落ちていった。

生まれた子供が一〇〇日もすれば、親の顔を見て笑いだす頃であろうに、白く濁った瞳には母親の顔は映らず、ハルはただ母の声を求めてうつろな眼差しを向けるだけだった。

父親は、朝、田圃に出て行くとき、そんなハルに、
「いい子にしておれよ、じきに上がってくるからな」

と声をかけ、夕方帰ってくるのと、

「いま帰ったよ」

とハルを抱き上げて、しばらく庭を歩き回っていた。父親は盲目になったハルが愛しくて仕方がなかった。けれどもこうしてハルを抱いて歩きながら、心の奥では、盲目の幼子がいることが世間に知れば、巻き起こるであろう無言の偏見が小林家に向けられることが怖かった。

盲目の子供が生まれたのは、先祖のたたりだ、神仏の供養をしないからだ、鳥を獲ったり獣を撃つたりしたたたりだ、不浄の家だ、と言われる危惧が大いにあった。

それでなくとも、最近喘息を患いすっかり弱くなったハルの母親は、盲目の子供を生んだといつては、姑から何かと刺すような目で見られがちだった。

だから、ハルは一步も屋敷から外には出してもらえなかった。いやそればかりではなく、ハル

が五歳になって、瞽女の親方から瞽女唄を習いはじめるようになるまでは、家の一番奥の小部屋に閉じ込められたままで出してもらえなかった。

「お前はいい子だから、ここでおとなしくしているのだぞ。『ハル』と呼ばれなかったら声を出すのでないぞ」

と常にいわれ、その寝間で一人で寝て、三度三度の食事も母がこの部屋に運んできた。

一番奥の部屋だから家に多くの人が入りしても、ハルの存在に気づく者はいなかった。

祭りの太鼓が聞こえてきたり、子供たちの遊びはしゃぐ声が聞こえてきても、ハルは、祭りの意味も知らないし、子供たちと一緒に外を駆け回ったこともないから、子供の声の意味もわからない。だから、そこに行ってみたくとも思わなかった。むしろこの部屋に一日いて、夕方帰ってきた父親から、

「そうか、今日一日おとなしくしていたのか、いい子だったな」

と褒められるのが何より嬉しかった。

そんな父親は、ハルが三歳になる前に、気分が悪いといって寝込んでから五日も経たないうち

に亡くなってしまった。

かわってハルの養育は、祖父の弟、孫爺さまの手にゆだねられた。孫爺さまは、村の区長を長年務め、村の人たちの相談事のまとめ役でもあった。

視覚障害者が職業的に自立するためには、つい先年までは、鍼、あんま、マッサージの技術を身につけるか、琴、三絃の音楽の世界で生きる以外に、なんらの術すべがなかった。きびしい修練と医学を学び鍼医になれるならば、社会的にも先生として認められて、家族を養う収入を得ることが出来る。

孫爺さまは将来、ハルを鍼医に仕立てることを考えて、隣村に住む鍼医のもとに弟子入りさせようと思っていた。ハルが五歳になった正月のこと、正式に弟子入りさせる日取りなどを決めるためにその鍼医を招いた。

ハルは、新しい着物を着せられ鍼医の前で挨拶をさせられた。鍼医とはどんなことをするのか何も知らない。

「いい子だね、お前さんは、しっかりと勉強して、立派な鍼医になるんだぞ」

とハルの頭をなでながら話してくれた。

そのうちに孫爺さまが出した酒で酔いが回るようになって、

「お前は、しっかりと勉強しないと、鍼を突き刺すぞ」

と、大声でハルを脅かした。ハルは震え上がった。あまり人に出会ったこともないので緊張していたから余計に怖くなってしまった。それまでも家では、だれもそんな大声を出すような者はいなかったから、鍼医が酔って怒鳴り声を上げるのが、無性に怖くなった。

「あんなおつかない人のいるところなどにハルは行かない」

と泣いて母の胸にしがみついて離れなかった。結局この話は断ることになった。

春、雪が解けはじめ小川の流れが急に水量を増す頃になると、ハルの村にも瞽女たちの一行が巡ってくる。やっと咲きはじめた白いこぶしの花や薄紅色の桃の花の下を、紺紵こんがすりを着て手甲脚絆てっこうきゃはんをつけて、小さなつづらを背負った三人の瞽女たちが、並んで歩いてくる。

瞽女たちがやってくると村中に光が走るように明るさが灯る。村人たちに笑顔が次々に広がっていく。瞽女たちはハルの家に一晚泊まっっていく。その夜は、みながハルの家に集まっってきて、瞽女たちの唄や三味線を聞いて楽しむ。鍼医を嫌ったハルを、母親たちは、将来盲目の身体で生きるためには瞽女にするしかないと考えようになった。

ハル自身も瞽女の唄や三味線を聞いていたので、どんなことをする人たちであるかは幼心にもわかっていた。けれども、瞽女たちは次々と村々を回つてよその家に泊まっっていくけど、本当の自分の家であるのだろうか、そんなことが心配でもあった。

瞽女の初旅

ハルは八歳になった十一月、初めて旅の仕事に出ることになった。

この日のあることは、ハルが瞽女の道に入ったときから決まっていたことである。そのため母は芸を磨き上げ、一人で旅に出たときに困らないように、ハルに細かいことまでの躰をした。

編み物をしたり、下着を縫ったりすることは勿論だが、自分の荷物を風呂敷できちんと包み、自分で着物を着て帯を締め、手甲脚絆をつけて、わらじを履き杖を突いて歩く稽古もさせられていた。着物は左右をきちんと合わせて着ることが難しかった。着物が前下がりになったり、腰巻の合わせ目がずれたりすると、母はそのつど厳しく叱つて直させた。

着物がどうにか着られるようになると、荷の担ぎ方をはじめ、手拭を頭に載せて笠をかぶる瞽女の旅姿の仕上げ方を練習した。その次は、挨拶の仕方。朝晩の師匠や仲間同士の挨拶から、見知らぬ土地の人々との会話の交わり方まで、母は一つ一つハルに教えていった。

それらがかでできるようになると、ハルに旅の支度をさせて、家の入り口に立ち、出立の挨拶をして門口に出て行く、次いで、戻ってきて今度は別の家に行つたつもりで、入り口を入り挨拶をして家にかかる、ということを繰り返して教え込んだ。

次は三味線である。ハルの背丈よりもはるかに長い三味線を、まず絃を外し棹をたたみ袋に入れる。それを油紙に包んで荷の中に入れてしまうのである。それができたら逆に、荷の中から三味線を

取り出して、手早く音が出るように組立てる訓練が続いた。

同年一月、ハルは師匠の樋口フミと姉弟子二人の四人で旅に出た。

明日出発するという日に、師匠は二人の姉弟子を連れて泊まりに来てくれた。そして母に旅での話をして聞かせた。翌朝、母と孫爺さまが、信濃川の土手まで初旅に出るハルを見送り、その無事を祈った。母は、背負った大きな荷物に隠れるように歩いて行くハルの姿をいつまでも見つめながら、こみあげてくる涙を拭くこともせず立ち尽くしていた。天気の良い冷たい朝だった。モズが、けたたましく鳴いてハルの旅立ちを祝ってくれた。

「ハル、いいか、旅に出ることは、瞽女としての仕事に出ることだぞ。これから師匠を『お母さん』と呼んで一生懸命務めるのだ、手が冷たくていやだとか、どんなことがあっても家に帰りたいなんて、言ってはならんぞ。そんなことを言ったりしたら『縁切り金』をとられてしまうのだ。

つらいときはじつと我慢して、神さま仏さまのお力を待つのだ。決して口ごたえなぞしてはならんぞ、お前は、言われたことを『はい、はい』と言って務めなければならんのだ。それがこれからの瞽女の仕事なのだ。

母さんはお前を目の悪い子にしようと思つて生んだのではないのだし、ハルの目が見えんのは、因果なんだから仕方がないんだ」

と、母は前の晩、ハルを抱きかかえるようにしてハルの両手をしっかりと握つて話して聞かせた。この初旅のため孫爺さまは、ハルに紙張りの三味線を買つて持たせてくれた。荷物は、敷布、

ネルの腰巻、下着、髪結いの道具などをまとめて背負った。背後から見ると小さなハルの身体が荷の中に隠れてしまふそふだ。

三条を出発して、東南の方向に約一五キロ歩いて下田村、さらに一〇キロ南に行つた栃尾地方の各集落を訪ねながらの旅である。もうすつかり刈り入れが終わり、初雪がちらつきはじめる頃の、冬の支度を急ぐ農村地帯である。行く手の正面に標高一五〇〇メートル余の守門岳、その左手に一三〇〇メートルを超す烏帽子山が、紅に黄に錦のように全山を秋の色に染めているが、ハルたちの一行はそれを目にすることもできずにひたすら歩く。

師匠の後ろに捕まつて歩くハルの脳裏に、母の声と抱いてもらった胸のぬくもりが蘇つてきた。下田村荻堀に入つてハルに課せられた大きな仕事は、今晚の宿探しである。この付近では瞽女は宿を貸してくれる家に一人ずつ分宿するのが習慣になつていた。師匠や姉弟子たちは、長年来ているところだから決まつた宿を持っていた。ハルだけが一人で泊まる家を探さなければならぬ。

一人で見知らぬ土地に行つて宿を貸してくれる家を探すということは、瞽女として、将来のためにも大事な仕事である。

瞽女の旅姿は、普通、三人か四人が一組になつて、袂の短い緋の着物で、裾を高く上げ、ひざから下に腰巻を出している。手甲脚絆をつけて足元は、わらじ履き。頭には、まず手拭で髪を押さえてから、瞽女笠といわれる菅笠をかぶつてあごの下で紐を結んで止める。そして襟巻きをか

けるように手拭を両肩にわたして四角い行李に入れた荷を背負う。その上に油紙で包んだ三味線のをせる。

一行の中で、弱いながらも視力のあるものが先頭に立つ。これは、手引き役の少女で師匠の家にいるときから、生活全般にわたって「目」の代わりをつとめる。そのために師匠は視力の残った子供を養女にしている。

その手引きの次に師匠が行く。その後ろを一番弟子、二番弟子と続く。それぞれが前の者の荷物に左手を軽く触れ、右手で杖を突きながら、離れないように一列になって歩く。

村に入ると、決められた瞽女宿にまず行って挨拶を交わし、今晚の宿をお願いする。許されると、そこに荷を降ろして、三味線だけを持って、村の家を一軒一軒訪ね、門付けして回る。

農家の門口の戸を開けて、

「ごめんなんしょ」

と、奥に声を掛けて三味線を弾きだし、三、四分の『門付け唄』をうたう。この門付けは、瞽女の一行がこの村に来たことを知らせる役割がある。旅芝居の一座が幟のぼりを立てて、太鼓や笛の鳴り物で、村の中を練り歩くのと同じ効果が期待できる。

平素、静まりかえっている田園に、三味線の音が流れる。ときには蟬が鳴いている木の下を、瞽女の一行が三味線を奏しながら短い『門付け唄』をうたって歩く。初夏には昼でも、蛙がそれに伴奏するように、リズムを打って鳴く。田圃の稲が風にゆれる中を三味線にのった瞽女唄

が流れると、仕事をしていた農夫たちは、一瞬その手を休めて腰をのばし、聞き耳を立てる。

「ほう、警女さが来なさったか」

とつぶやきながら、今日は早目に仕事を切り上げて、警女唄を聞きに行かなければと、残された農作業の段取りを考える。

家に残っていた主婦や老婆たちは、一年ぶりに門に立った警女一行を温かく迎えている。

へあら玉のとしのはじめに筆とりそめて

よるずの宝かきとめる

わが恋は遠山とわやまかげのあの沢の雪

いつうちとけて深くなる

門付けのときは三味線を立ったままで弾くので、右ひざを軽く曲げて、ももの上に三味線の胴を乗せるようにする。そのためちよつと前かがみになり、右肩が落ちたような姿勢になる。

『門付け唄』が終わるのを待って、縁側に座らせてお茶と漬物を出す。そして家人はお布施のつもりで米を茶碗に一杯、警女が持つている袋に入れてやるのが普通である。今日は仏様のご命日だからといって一升くれる家もあつたりする。また家によつては、大豆、小豆、なかには、すき紙やちり紙、麻の原糸などそれぞれの地方の特色ある品物を出してくれる。

自分たちのためにうたつて聞かせてくれたという警女の好意に対して、できる限りのお礼である。

久しぶりに訪ねてくれた瞽女から、いろいろな話を聞きたい、少しでも長くここに座っていてほしい。先日の大雨で峠の道が崩れたと聞いているが、見えない目でどうやって通ってきたのだろうか、隣の村の庄屋さんに嫁さんが来たそうだが、どんな人なのだろうか、そして、川の向こう側の村の今年のブドウは、どんな按配なのだろうか。

方々を旅して歩いている瞽女は、いろいろな情報を持っている。こちらの村の出来事。あちらの村の噂話、そしてここに来る道々で、耳にした話や直接自分たちが体験したこと、あまり村の外に出ることの少ない人たちにとって、どの話を聞いても興味深いものばかりである。どこの家の門かどに立っても、瞽女を迎えてひとしきり話の花が咲く。

瞽女にしてみても、日暮れ前までに村中を早く回りたい気持ちと、一年ぶりに訪ねる家の家族の消息も知りたい、今年の蚕の上がり具合も気になるところである。

こうしてお互いの心と心が結び合う会話が遠来の客をもてなす術となる。瞽女たちも、この村の人たちが、自分たちを喜んで迎え、こうして待っていてくれる。だからこそ、崩れた峠の山道を危険をおかしてまでも、この人里離れた辺境の地を訪ねたいという気持ちをかりたてられるのである。

また、久しぶりに来た村だからこそ、情報を集めなければならない。泊る予定の瞽女宿の家には病人がいらないか、家族の人たちに変化はないのか、村での最近の出来事は何か、これからの村人たちとの会話に必要な情報を急いで探る必要がある。こうして夕方までに村中を回って瞽女宿

の家に帰り、あらためて家人に挨拶をして唄を二つ三つ聞いてもらってから、宿の家が用意した風呂をいただき、心づくしの夕食の膳につく。

食事が終わる頃になると、その家に村人たちが集まってくる。宿の家では間仕切りの襖を外し表座敷を開放して、臨時の会場をつくる。そこに、袂の長いきれいな着物に着替えた瞽女たちが出て芸を披露する。

まず宿の人に対して宿と食事をいただいたお礼の意味を込めて『瞽女松坂』を一節ずつ交代でみながうたう。それから口説や民謡、そして段物などを次々と集まった村人の求めに応じてうたいつづける。終わるのは、深夜一時、一二時になることがしばしばである。

場所を提供した宿の家では、村人に対して茶菓を出し、冬ならば火鉢を並べ炭火を入れたり、途中で熱いうどんなどを振る舞う。

宿の者が「ざる」を回して瞽女に対する謝礼の祝儀を集める。これは「おひねり」とか「はな」と呼ばれ、紙にくるんだ現金が中心になるが、時には特産の反物であり米であったりする。決していくらでなければならぬというものではない。村人一人一人が自分のできる限りの気持ちで形にする。また瞽女にしても「ざる」が、瞽女の収入の基本になるわけだが、少ないからといって、芸の披露を短くするというものでもない。いわゆる「お布施」なのである。贈る者も受ける者も「布施の行」を実践しているのである。

瞽女たちは、托鉢僧の修行のように、村々をめぐる人々に敬意を表して歩いた。三味線と瞽

女唄を披露することで、多くの人を癒した行為は「布施」という仏の教えを実践してきたといえる。それは、自分たちの芸を上から下に一方的に施すのではなく、聞き手が喜んでくれるからと、苦勞して峠を越え、谷を渡って来て、人前で精一杯芸を演じるのである。そこに送り手としての喜びがある。受け手も、自分たちの出来る範囲内で、自然な形でその勞に報いる。

このことは、まさに道元禪師どうげんぜんしが説いた『正法眼蔵』しょうぼうげんぞうのなかの四摂法ししよくほうに説かれている「布施・愛語・利行・同事」の心を見ることができるといふ。愛語とは、優しい言葉を掛け合うこととお互いの心が安らかになる言葉の布施である。その結果として、自分と相手の人がともに喜びを得る「利行」を受けられる。そしてお互いの立場を認め合いともに生きる道「同事」を得るといふのである。布施とは、何も金品を授受する「財施」のことだけではないのである。

瞽女と村の人々、晴眼者と視覚障害者という垣根を越えた交流が、その夜つくられる。瞽女は障害を克服した苦勞を見せず、今まで修得してきた芸を一生懸命に演じ、聞いてもらう。そのために、長い段物をひたすら暗記してきた。三味線の奏法、バチ捌きも、村人に喜んでもらうこの夜のために練習を重ねてきたのである。

ひとくぎりの演奏が終わると拍手や掛け声を受けて、瞽女たちは安堵する。自分たちの芸で、村人たちを喜ばすことができたのだ、村人たちの心を慰めることができたのだ、という矜持が湧いてくる。

江戸末期から昭和中期まで、こうしてお互いに自分たちの持つもので、相手に不足している部

分を補う心、いわば、福祉の原点がそこにつくられ、健常者と障害者がともに生きるノーマライゼーションが生まれていたのである。

すべてが終わって村人たちが引き上げてから、やっと瞽女は眠りに入ることができる。

この宿を提供してくれる家は、村人が大勢集まって唄を聞くだけの広間がある家でなければならぬ、一度泊めると次に来たときから泊めなければならぬ、ということからかなり瞽女に対する理解の深い人のいる家でなければならない

山形県米沢地方は、古くから、特に障害をもつ人には親切で、

「善根を施して 利益を待つ」

「お蚕さまもよく上がるから」

「お不動さまを信仰する者同士だから」

といって、大きな農家では四人ぐらの瞽女と一緒に泊めてくれる家が多かった。しかし新潟県東頸城郡、魚沼地方では、集団で行動する瞽女たちでも、一人一人別々の家に泊めてもらう習慣になっていたようである。

初旅に出たハルは、最初の晩は籠場という集落の、酒やタバコを売る家に全員で泊めてもらえしたが、二晩目は飯田という所に泊まることになった。ここでは、ハルの宿だけがなかなか見つからなかった。

今晚の宿探しが大きな問題としてのしかかってきた。門付けして歩きながら、農家の人に、

「私の宿を今夜お願ひします」と言つても、ハルの小さな姿を見て、

「子供は、夜泣きをするから」

「おしっこをたれるから」

「唄のできない瞽女は泊められない」

などと言われ、五軒も一〇軒も断られる始末だった。

やっとお寺に行つてお願ひしたら、「お御堂でよければ泊まつていきなさい」と言われて、お御堂に泊まつた。

以前、孫爺さまから、

「お寺に泊まるようなことになつたら、夜中に便所に行くのも大変だから水を飲まないようにしなさい。お御堂は、夜中に死人が運び込まれることがあるかも知れないが、そんなときは、お念仏を唱えておれば何も怖いことはないから」

と言われていたことを思い出しているうちに、緊張と疲れから朝までぐっすり眠り込んでしまった。

お寺の朝食は遅いので、他の宿に泊まつた人たちに遅れると叱られるから、これも母親から教えられたとおり、お寺の人に、

「朝ご飯は、食べたくありませんから」

と云つて、丁寧にお礼を述べて荷物を担いで玄関で迎えを待った。
やがて来た師匠に「お御堂に泊まつて怖かつたらう」と言われた。

次の日もまた、荷物を背負つて歩く。時には、みぞれ混じりの冷たい風が、ハルの頬を叩いた。林の中に入ると枯葉が足元でかさかさ音を立てた。田圃の畦道に出ると薄氷が張つた水溜りに足を踏み込む朝もあつた。

二日、三日と歩きつづけるとハルは、なれない足が痛みだした。でも「足が痛い」などと言でも言え、
「お前は、もう連れて歩けないから家に帰れ」といわれ、「縁切り金」を親たちに要求される結果になる。どんなに痛んでも「痛い」とはいえない。どんなことがあつても修業だと思つて耐えなければならなかつた。

この旅の途中、村を歩きながら『門付け唄』をうたつてしていると、

「お前は小さくて可愛い子だな、唄も可愛いな、もう一回うたつて聞かせてくれよ」

と言われた。ハルは初めて自分の唄が褒められて嬉しくなつた。本気でもう一度そこで言われるままにうたつた。終わつてその家から外に出た途端、

「お前は、いい気になつてうたいやがつて、誰がうたえといつたか！」

と師匠から叱られた。

「この小さな髻女さんはいくつだね。上手にうたつて、これでかんざしでも買つてもらいなさい」と、お金をくれた家があつた。そのときも家から出ると師匠は金をさつと取り上げて、

「そんなに褒められたいのなら、あの家の子になれ」とハルに言うのである。

門付けしてもらった米を持つのはハルの役目だが、これがだんだん重くなる。小さなハルの身体には、重さが身にしみるようになる。

ハルは大人になつても一三五センチぐらいの背丈しかなかった。当時八歳だが、おそらく五六歳ぐらいにしか見られなかったのである。だから農家の人から、

「こんな大きな荷を担いで、親方衆、あんたが担いでやるんだがね」
などと言われたりすると、

「お前が、荷物が歩くような格好しているからだ。こんな小さな身体して、はよう大きくなれ」と叱り

「早く米を売れるところを探して来い」
と付け加えるのだった。

門付けのときに茶碗一杯の米をもらいながら集落を回っているうちに、すぐに一斗（一〇升）ぐらいになる。こうして集めた米は、町の商家とか、米屋で買い上げてもらって現金化した。この金が旅の収入である。旅から帰ると参加者に公平に分け与えられた。

旅の間は、米を売って金に替えるだけでなく、その日その日の昼食を食べられる家や、泊まれる家を探すのも末弟子の仕事と決められていたので、これらはみなハルの仕事だった。

幼いハルにとって何事も初体験である。師匠や姉弟子たちに命令されるままに村の中を駆け回

らなければならなかった。

師匠の仕置に耐える

旅に出て一五日目、下田村のもぐら谷に行ったとき、宿を探して一軒の農家に入った。家の主人は、他家の祝言に行つて留守だが、「まあ、どうぞ上がりなさい」との主婦のすすめで師匠だけがそこに泊まることになった。

その主婦は「主人がいないけれど」と言いながらも大変なご馳走をしてくれた。夜になると村人たちを大勢集めてくれた。ハルたちは熱を入れて替女唄を披露した。祝儀もかなり集まつて師匠も喜んでくれた。一時過ぎて替女唄も終わつて村人たちが帰つたあと、姉弟子たちもみな別々の宿に引き上げていった。ハルも別の家に宿を借りて床に入った。

すると夜中過ぎに、師匠を連れてその宿の主婦がやつて来た。

「主人が酔つ払つて歸つて来て、『知らんうちに替女を泊めた』と言つて怒り暴れるので、師匠をこちらで泊めてもらえないか」

ということ、結局その夜はハルが泊まった家に、さらに師匠も加わつて寝ることになった。

翌朝である。宿を出るまでは澄ました顔で、宿の人たちに礼を言つたり『門立ち唄』をうたつたりしていた師匠が、宿を出て村はずれまで来ると、急に怒り出して、

「お前は、宿探しもろくにできないのか。おらが寝ようとしていたのに、夜中に放り出されるよ

うな宿をお前が世話をしたのだから、その責任をとってもらうぞ、お前なんかもう家に帰れ」

いくらハルが謝っても、すごい剣幕で怒ってなかなか聞き入れてもらえない。何かにつけて、家に追い返して、「この子は、瞽女として務まらないから」と「縁切り金」を出させる口実を探すのである。

嬉しいこともあった。その日も、みぞれの降る寒い日であった。塩川という集落に入つて宿探しをした。姉弟子たちはどうにか宿に入ることができたのに、ハルだけが残つた。仏に願う気持ちで一軒の家に入った。

「おや、お前は三条三貫地の娘でないかね」

と先に声を掛けられて、ハルは驚いた。

「おお、こんな寒い日に、大変だったろう。さあさあ、早くあがれ」

よく聞いてみると、この家の人が三条に綿や紬を売りに出たときは、ハルの家を宿にしてもらっていたのだ。その折に孫爺さまからハルの話を聞き、やがて塩川に瞽女として行つたら泊めてやつてくれと頼まれていた、というのである。

ハルにとつては、まさに仏に出会つた気持ちである。早々にわらじを脱ぎ、囲炉裏の火を掻き立てて暖めてもらった。風呂にも入れてもらった。そして夕飯には温かな汁をご馳走になった。その晩はその家のおつかさんが

「いくら仕事だといっても、私には目の見えんな小さな我が子をば旅に出せんわ」

と言つて、ハルを抱いて寝かせてくれた。

ハルは物心ついてから母親にさえ抱かれたことがなかったので、とても嬉しかった。あの、旅立ちの前の晩、母に抱かれるようにされたことを思い出し、その家のおつかさんの温もりがハルを何か甘酸っぱいような柔らかな世界へと誘い、心地よい夢の中に引き込んでくれた。

翌朝、

「ハルさんや、あんたの好きそうなおかず、たーんと入れといいたからな」

と弁当を作つて持たせてくれた。そして、

「今晚は、みんな、おらとこさ来て、泊まつてくれや」

とまで言つてくれた。

ハルは嬉しくて仕方がなかった。早速師匠たちと一緒になつたとき、その話をした。昼の弁当は師匠が食べてしまったので、実際はどんなおかずが入っていたのか、ハルはわからなかった。

夜、その家に今度は師匠たちと四人で泊まつた。そして夜は家の人たちだけに唄を聞いてもらった。

「ハルさんや、お前はまだ小さいのに三味線も上手に弾いて、たいしたもんだね。来年もまた来いよ、親方の言うことを聞いてもつと出世して来なさいね」

と翌朝、立つとき言つてくれた。ハルは、心の底からその家の人々に感謝した。

初旅に出るからは苦勞の連続だっただけに、この宿での二晩は久し振りに手足を思いきり伸ば

して、身も心も休めることができ眠りを味わった。

この初旅のなか、母が今まで厳しく躰てくれた意味と、そのありがたさを身にしみて感じる出来事があった。

旅の途中で、チヨという一〇歳ぐらいの子が弟子に加わったことがあった。チヨは着物をたたむことも何もできなかった。そのため師匠からは、

「お前はなんの役にも立たんもんじゃ、山の中に捨てていくぞ」

と、何かにつけて棒で叩かれていた。チヨはそのたびに、ベソベソ泣いていた。やがて一〇日も経たないうちに親が迎えに来て、「縁切り金」を出して連れ帰って行った。

ハルは厳しく躰る母親をひととき、憎らしいとさえ思ったが、こうして旅に出てみると、そのお蔭で、師匠から叱られることはあっても棒で叩かれることもなく旅を続けることができるのである。チヨの泣く声を聞きたびごとに、しみじみと母のありがたさと、厳しく躰てくれた母の願いを、幼い胸の中に感じ取るのだった。

三〇日間に及ぶ初めての旅の最後は、ハルの家である。

「縁切り金」を取られるようなことがあつてはならないと緊張の連続だっただけに、我が家に入った瞬間、迎えに出た孫爺さまに飛びついた。

「おお、ハル、帰ったか。まあ無事に務めてきたか、よくやった」

と孫爺さまが、ハルを抱きかかえるようにしてくれたとき、ハルは熱いものがこみ上げてきて、

孫爺さまの手を力強く握りしめた。

孫爺さまと母たちは、師匠たちにハルが無事に務め上げたお礼を言つてご馳走をした。師匠や姉弟子たちは口々に、母の前ではハルのことを褒めてくれた。一行は、ハルの家で二晩ゆっくり泊まつて行つた。

師匠たちは、それぞれの家に歸つて行つた。すると間もなくド力雪が降つて越後は本格的な冬になつた。自分の背丈ほど積もつた雪の中で、ハルは、この雪の中を大きな荷を背負つて歩かなければならないこれからの自分を思い浮かべるのだつた。

こうして、ハルの瞽女としての初旅は終わつた。次の年の明治四二（一九〇九）年以後、ハルの旅の仕事は、昭和四六（一九七一）年まで六二年間続けられるのである。

ハルの初旅の足跡を今日検証してみると、一日の行程はせいぜい一五キロ、短い日には四〜五キロぐらいしかない。その上、生家から遠く離れても二五キロぐらいの半径の中を歩いていた。現在なら自動車で走れば三〇分とかからない、福島県寄りの県境の山々に抱かれた純農村地域である。

今まで自分の家から一步も外に出されなかつたハルが、瞽女の仕事を自覚して、幼い身体を運んだ道は、当時の面影を伝える家や寺はすっかり変わり、その風情はまつたたくない。萱葺きの家々は融雪装置をつけたトタンや瓦屋根となり、牛小屋のあつた場所は自動車の車庫に変わっている。

田圃の畦に高く並んで植えられていた、刈り取った稲を干す「はぎ木」もすっかり消えてしまった。秋、稲の黄色い垂れ幕ができる、越後独特のはぎ場の風景が消えてもう久しい。

西の彼方に見える、六三八メートルの弥彦山やまひこの裾を長く引いた姿と、その右側の四八二メートルの角田山かくたのその姿だけが変わっていない。おそらくこの一〇〇年間、大勢の瞽女の姿を見つめてきたのであろう、今日、新幹線の車窓からこの二つの山を遠望したとき、できることなら、この山々から、当時の瞽女たちの様子を聞いてみたいという一念にかられるのである。

二人目の師匠のもとで

ハルは一六歳になった。相変わらず身体は小柄だが、娘になった。頭痛もちのため月に一度床から離れるのがつらい日があるが、その時期を過ぎると元気が出て、三味線を弾き、うたう仕事を楽しかった。

この頃、ハルは樋口フジのもとを話し合いで離れて二人目の師匠ハツジサワのもとで、新たな瞽女生活をはじめていた。

そこでは、師匠が絶対的なものとして君臨していた修業時代とまったく異なっていた。師匠からの陰險ないじめはまったくなくないばかりか、ときには師匠と同格に会話を楽しみ、話し合うことができた。人間の生き方や社会との関わり方などをハルは自然に学んでいった。

大正五（一九一六）年夏、ハルは師匠サワと手引き役の八歳の弱視のヨシコ（芸名ハツイ）の

三人で、初めて米沢地方の旅に出かけた。

私は、昭和六〇（一九八五）年秋、警女民俗の研究家・故佐久間惇一氏を新発田市のお宅に訪ねて、新潟・山形両県の地図に赤線を入れながら、そのコースを詳細に伺ったことがある。ハルとの長い交流の中で調べたのであろう、まるで佐久間氏自身が歩いたかのように語られたのが、昨日のことに思い出される。

そのときのハルは、六月二〇日頃、長岡のサワの家を出て汽車で羽越線の中条まで行く。そこで、あんまをしている友達の家にも二晩泊まり、ここでは昼間は、町中や近在を三味線一丁持つて門付けして回った。夜になると、飲み屋街や色町を歩き、賑やかそうな家に声をかけると座敷に招き上げられ、二、三曲うたつて祝儀を受けるといふ働きをしていた。三日目は、黒川村を斜めに横切り、荒川峡に出て流れに沿って歩き下関に泊まる。

次いで、山形県に入り小国、五味沢から北小国地方を歩き小国に戻り泊まる。そして、今日の米坂線に沿って歩き、赤湯温泉から高畠、さらに南の小野川温泉にまで行き、やがて戻り道になり小国に出る。そこから、また北小国地方を回ってから帰路につき十月十六〜七日頃長岡に帰って来た。この間四か月、一二〇日におよぶ長旅である。

今日では、国道一一三号線が、満々と水をたたえた荒川の流れを右に左にと見ながら走っている。南に飯豊山、北に朝日岳に囲まれたこの付近は、春は新緑にサクラランボ、秋は紅葉の美しさ

に加えてブドウ狩りを楽しめるところである。

米坂線の開通は昭和一一（一九三六）年八月のことだから、ハルが最初に訪ねた頃は、わずかに人里が点在する不便なところであつたろう。それだけに細い山道を、幼い手引きの子供について登り、ときには溪流にかけられた丸太の一本橋を、こわごわ渡らなければならないこともあつたろう。しかも、大きな荷物と三味線を背負つてのことである。

目の見えない者が、どうしてそんな難所を歩いて行つたのだろうか、また、何故行かなければならなかつたのだろうか。

ハルは語つてくれた。

「谷にかかった一本橋を渡るのが、一番つらかつたね。ごうごうと、下から水音が聞こえてくるし、冷たい風が足元から吹き上がってくるすけ、もう足がすくんで前に出ないことがあつたね。いくらか杖で探つても丸太が渡つてあるだけで、つかまる所など何も無い。最初の親方のときに、『落ちて死んでもいいぞ、死ねば、家の者が喜んで迎えに来るだろう』なんて、人をけしかけるだね、本当に死ぬ覚悟で渡つたもんだがね。一本橋は本当に怖かつたね。浅い川にかけられた一本橋ならば、むしろ川の中歩いて渡つた方が安全で、歩きやすかつたすけ、本当に命がけの仕事でしたね」

視力のない者にとって丸太の一本橋は恐ろしかったであろう、といつてそれを渡つて行かなければ先に進めない。とにかく先に行くことしか考えずに歩かなければならなかったのである。その先の農村では、季節ごとに訪ねてくる瞽女を待っていた。ラジオがやつと始まった頃である。娯楽としては、瞽女や浪曲語りが回つてくるの待つ以外に何もなかった。だから瞽女の来訪は、村にとって「ハレの日」になる。

ハルが歩いた山形県小国地方の道の途中の、古田から小国に抜ける山道に石滝の集落がある。そこに自然石を置いた墓、沢で水死した瞽女オカツの墓がある。

明治四二（一九〇九）年のこと、雨で増水した石滝沢に手引きの少年を連れた三人の瞽女がやつて来た。少年は一人ずつ手引きをして、川の浅瀬を選んで対岸に渡していた。五〇歳近くになったオカツは少し視力が残っていたので一人で川を渡りはじめた。

あと少しで岸に上がれると思つた瞬間、深みに足をとられて転んだ。オカツは大きな荷を背負い、長い三味線をその上に乗せていたので、荷物が水を受けて思うように立ち上がれなかった、三味線が流された。少年があわててオカツの手を取つて引き起こした。が、再び足元の石が強い流れですくわれ、オカツは水の中に倒れた。そのまま深みに流されていった。

知らせを受けた村では大勢の人が出て、救助にあたったが、発見されたときは死体になっていた。村の人は、ねんごろに弔い、自然石を置いてオカツの墓とした。毎年そこで供養が続けられた。他の瞽女たちも、そこを通ると必ず回向を手向けたという。ハルもやはり通るたびにお参り

をしていた。

そんな水死事件があつたせいか、この小国地方では川に近づく瞽女の姿があると、遠くからでも村人が声をかけて、駆けつけてくる。そして背負つて川を渡してくれる習慣が最後まで残つていたという。

危険な箇所は山道にもある。壁のようになつた崖の上を行く小道や、片方が深い谷に崩れ落ちてゐる細い山道は至る所にある。一步踏み違えれば、千尋の谷底に落ちてしまふ。そんな道を不自由な身で大きな荷を背負つて通つていかなければならなかつた。「瞽女ころび」などの名前がついた場所も各地にあつたという。

天候が変わるときもある。一般的に雨風の強い日は動かないものだが、歩きはじめてから降られることがしばしばある。そのときは菅笠をかぶり、桐油紙の合羽を荷物ごと覆うように背中からかけて歩く。この雨の中の歩行は、笠に雨が当たる音が耳に響くので、前の者の足音や杖音がわかりにくい。音で目標や方向が理解できなくなり、とても歩きづらい。こんなときは手引き役のわずかな視力だけが唯一の頼りになる。

始末に悪いのは雪である。雪が降ると道だか、田圃だか区別ができなくなる。その上、雪道は音が吸収されてしまうので方向がわからない。杖で足を叩いても音が反射してこないから目標がつかみにくい。寒さから身を守るために笠の下で手拭などでほおかぶりして耳をふさいでしまふ。だから、余計に音が聞こえなくなる。手引き役のかすかな身体の動きだけを手がかりに歩か

なければならぬ。

視覚障害者にとつて雪道ほど危険なものはない。雪国で生活する視覚障害者は、一人で歩いていて道を失い立ち往生し、寒さの中で二時間も三時間も、人の通るのをひたすら待つて助けを乞うたという経験が誰もが持っている。

私が直後聞いた話では、帯広市で北海点字図書館を創設した全盲の傑人・後藤寅市（ていとうとらいち）は、昭和中期の雪の降る夜、マッサージ治療を済ませて家に帰る途中、凍てついた雪道を歩いているとき、滑つて転んだ。その瞬間身体がどう回ったのか、方向を見失ってしまったのである。起き上がった方向にそのまま歩きだしたのがいけなかった。帯広市は東西の道と南北の道とが碁盤の目になつて非常にわかりやすい町である。しかし、後藤は縦横の交差点を数えながら自分の家と思つている方向にひたすら歩いていくのだが、いくら行つても身体が覚えていた場所に辿り着かない。いつもであれば、聞こえてくる音や風の流れ、住宅地のかすかだが特有な香りなどで、我が家の近くに来たことがわかる。だが、どうしてもその雰囲気を感じるところに出ない。道を間違えたことに気がついたのは、転んでから三〇分も歩いてからである。そこで今度は、転んだ場所に戻ろうとして歩きだした。

しかし雪が積もつた道である。平素であれば道が舗装されているか、敷石が敷き詰めてあるか、砂利道かなどの足裏から感じる情報が、道路を識別し自分のいる場所を知る材料になつてはいるが、すべて雪の下である。どこを歩いてもみな同じ雪ばかりなのである。

音も歩く上の重要な情報源である。商店の売り声、電器店のラジオの音、名刺印刷の機械の音、などなど。それに匂いも大切な手がかりである。花屋の香り、蕎麦屋のだしをとる香り、理髪店の匂い、漬物屋、酒屋、それぞれ商店には独特な香りがある。

視覚障害者が道を歩く場合、それらのすべての情報をその瞬間に整理し判断しているから、あの白杖一本で目的の場所に到達できる。さらに言えば、杖で一步前を叩くことによつて、その感触と音の反射などから、安心して一步を前に出せる情報を得ていけるわけである。

雪が降ると、その情報が全部なくなってしまう。こうして視覚障害者は、方向感覚を失つてしまふのである。

後藤は、深夜の雪道を二時間程さまよいつづけた。誰かに道を尋ねたいが、犬一匹通らない。寒さはつゆのり足元から冷たさが上がってくる。とうとう歩き疲れて呆然と立ちすくんだ。

どのくらい時間が過ぎたろうか、意外に近くで汽笛が響いた。そして貨物列車が通り過ぎていった。その汽車の音で鉄道線路の場所が確認できた。初めて自分がまったく違った方向に、それかなり遠くまで来てしまつていることに気がついた。

やがて馬車の鈴の音が遠くから聞こえてきた。

「助けてくれー」

彼は大声で叫んだ。

しばらくして馬車が近づき、驚いた御者に救われて町まで連れ戻してもらつた。

視覚障害者にとって雪の恐ろしさを物語る話である。まさに昭和の時代になつても、『北越雪譜』を地で行く雪の話は各地にあつた。

ハルもやはり、こんな雪で苦勞したことがあつただらう。

さて、ハルの米沢地方への初旅は夏のことである。

師匠のサワと、手引きのハツイの三人だったのでハルは楽な気持ちで歩くことができた。旅の仕事がこんなにもゆつたりした気分を務められるのが嬉しかった。

しかし、四か月間、毎晩他人の家にばかり泊まって歩くのだから、常に他人の目を意識しなければならなかつた。

特に宿を借りる家に対しては、心を配る必要がある。ハルにとっては初めての家ばかりである。サワが一年前に泊めてもらった家でも、今度来てみたら病人が出て宿を借りられないということもある。そのときは、急いで他の宿を貸してくれる家を探さなければならぬ。

葬式や法事にぶつかるともある。そんな日は、宿を借りられても三味線を弾くことができないので、静かに三人で夜を過ごす。といっても、やはり楽しい旅だった。

一般に米沢地方は養蚕農家が多く、そのため家が大い。養蚕の守り神は弁天さまである。誓女の守り本尊と同じだということもあって、この地の人々は誓女に対して大層親切である。ハルはこの米沢の旅の日々を充実した気持ちで送った。それに同行したのは、ハルの実力を認めて招

いてくれた二人目の師匠サワである。ハルは本当の姉妹のように気を許しあつた毎日を旅の空で送っていた。

「替女の旅は、組み合わせだね。みょうおんじょう 妙音講のときに、その年の旅の仕事の予定が決まり、誰と誰とが組んで一緒に歩くのかが決まるが、問題は、この組み合わせだね。同じ組の中でも三〇人、四〇人というから、いろいろな人と組んで仕事をしなければならぬ、よい人と組めば祭りだね。仕事は楽しいし、楽に歩いて行けるね。

このホームの生活も同じだね、前の老人ホームのときは健常者と一緒だったせいか、組み合わせが悪く苦勞したね。

この『やすらぎの家』に来てからは、何の心配もいらぬ、本当にここはよいところだね。だげど一部屋に二人で暮らしているけれど、組み合わせだけは仕方がないね、年寄りだもの。年寄り同士お互いに言いたいことも言わずにあきらめなくては。そんなこともあるけれどね。

子供のときから難儀なことでも、我慢して耐えてきたから、今こうして面倒を見てもらえるのだって、喜んでいますがね。昔は着るものも着ないで、食べるものも食べないで務めてきたのだから、神さまや仏さまがちゃんど見ていてくださった。

今の私は、一生の極楽にいるようなものだね。みなさんに、こんなによくしてもらつて、ありがたいものだと感謝していますがね」

あとがき

山アジサイの花が森のなかで木漏れ日を浴びて驚くほどの美しさで私を呼び止めた。私は胎内の里の深い緑のなかに、こっそり輝いて咲くこの花の姿を発見した。以来、私は胎内の自然に魅せられた。

昭和五四（一九七九）年六月、当時私が担当していたNHKラジオ番組『盲人の時間』で、「胎内やすらぎの家」で生活している小林ハルさんを紹介するために新潟県南蒲原郡黒川村（現・胎内市）を訪れたときのことだった。

そのおよそ九年前、昭和四三年十一月、当時新潟県高田市（現・上越市）に住んでおられた警女、杉本キクイ、シズの師弟を取材し「警女の人々」と題して放送したことがあったので、おぼろげながら警女の世界を垣間見たつもりだった。

しかし、ハルさんから聞く警女に入門したころの厳しい躰と修業を続けてきた話は想像以上に激しいものだった。

以来、四分の一世紀にわたって私は毎年一、二回ハルさんを訪ねてはお話を伺ってきた。

その間に私は大勢の人に出会った。みな警女唄が聞かれなくなつて一〇年、一五年過ぎている

のに懐かしがっている人ばかりだった。

昭和六一年、新潟県立女子短期大学に招かれたハルさんたちの瞽女唄公演を取材したことがあった。初めて瞽女唄を演じるハルさんたちに接した女子大生は驚嘆していた。

「よく通る声と美しさ、素晴らしい芸をもった女性たちの存在と、彼女たちが生きてきた体験に感激した。目の見えない人があんなに一生懸命生きてきた姿が、今ここにある。命の叫びを聞いた感じだ……」と、口々に語っていたのが印象的だった。

九州地方には鎌倉時代以降から琵琶を手にして平家物語を弾じて歩く盲目の琵琶法師が存在していた。そのなかからやがて、天台宗に属して経典を読誦し、家、屋敷の不浄を祓う祈禱を行う琵琶盲僧が生まれ活躍していた。盲僧たちは檀家を回って庶民の信仰を支え、古い伝統を背負って生きてきた。しかし現在では、檀家を回っているのは延岡市の永田法順師ただ一人になった。

私はNHK在職中、「盲人の時間」を長年担当して、視覚障害者の厳しい生きざまをつぶさに取材してきた。その人たちが残したものは何か、そのために彼らが流した血と涙と汗、そして努力はなんのためのものだったのか。そうした視覚障害者が日本の伝統音楽の多くを担ってきた事実を、二一世紀に生きるすべての人に理解していただくことが、瞽女や琵琶盲僧の方たちに私ができるささやかな餞である。と同時に障害者を再び瞽女のような極限の生き方に追い込むことがあつてはならないと考えた。それは福祉国家を掲げる日本においてはもう許されないのである。

本書は想を起してから一〇年余になる。その間に書きためた原稿は本書の倍近くになった。

電子書籍のための付記

令和の時代である。日本の伝統文化を伝承してきた視覚障害者の血のにじむ努力を知る人はほとんどいなくなつた。

琵琶盲僧永田法順も南九州の風土のなかで墨染の衣を着て白杖をついて檀家の不浄を祓い家内安全五穀豊穡を祈願して歩く姿が、風物詩になつていたが、平成二二（二〇一一）年一月に永眠した。薩摩琵琶を生んだ常楽院法流の琵琶盲僧は、鹿児島県の無形文化財「妙音十二楽」を伝承してきたが永田法順を失つて以来演奏ができなくなつた。

田圃の脇に置かれた頭に五キロもあるかと思う大きな米袋を乗せて運ぶ盲僧の姿をした「田の神様像」だけが辛うじて琵琶盲僧の名残をとどめている。

瞽女体験者も皆無になつた。昭和五十年代に「瞽女が消える」としてブームが起こり書籍はもちろん写真集からLPレコードまで数多く出版された。しかし単なる一時的な感傷が残つただけだつた。

平成一一年、「ハルの百寿を祝う会」を開催したとき、車椅子で登場して健在ぶりをみせ、忘れられていた瞽女の存在を世に示したことが契機となつて『瞽女顕彰碑』が建立された。そして

警女文化が再び注目された。

今日では上越市に「警女ミュージアム高田」も開設されて観光客も足を運ぶようになった。そして、伝統文化を支えてきた視覚障害者の活躍が語り継がれるようになった。本書が電子書籍となつてさらに『警女』に対する認識を深めるために役立つことを願っている。そんななかでITシステムに完全に乗り遅れた私は、かろうじて一本指でキイを叩き、ミスタッチと変換ミスに苦勞しながらこの付記を書いた。

令和四年一月 横浜も十九年ぶりの寒さを記録した雪の降る日

小林ハル略年譜

明治三三（一九〇〇）年一月二四日、新潟県南蒲原郡旭村三貫地新田（現三条市）に生まれる。

三か月後、白内障で失明。

明治三五（一九〇二）年父豊造死去。そのため祖父の弟の孫爺さまに育てられる。

明治三七（一九〇四）年瞽女の師匠・樋口フジに弟子入り。母の厳しい躰が始まる。

明治四〇（一九〇七）年瞽女唄と三味線の稽古、寒中の信濃川土手での発声練習を始める。寒

稽古は二一歳まで毎冬続けた。

明治四一（一九〇八）年一月に初めて師匠に連れられて下田村方面に旅の仕事に出る。

明治四三（一九一〇）年一月、母トメ喘息が悪化して死去。

大正四（一九一五）年春、樋口フジのもとを離れ、ハツジサワの弟子になり、長岡の妙音講

で大親方山本ゴイに認められる。

大正一〇（一九二二）年師匠サワが死去。残された弟子をかかえて独立する。

大正一一（一九二二）年革張りの三味線とベッコウのバチを持って、親方として認められる。

昭和一〇（一九三五）年弟子の土田ミスが男のもとに走り、以来、翻弄される日々が続く。

昭和三五（一九六〇）年笹神村出湯（現阿賀野市）に移り、石水亭の二瓶文和氏の世話で、養

女ミサとともに居を構える。

昭和四八（一九七三）年 新発田市の養護老人ホームに入所して、瞽女を廃業。やがて同市の教育委員会の依頼でハルのもつ瞽女唄の全曲の記録録音作業が始まる。

昭和五二（一九七七）年 社会福祉法人・愛光会「胎内やすらぎの家」に入所。瞽女仲間にも再会する。同年初めての東京での公演に出演する。

昭和五三（一九七八）年 東京、国立劇場の「祝福芸の系譜―萬歳と春駒―」に出演。「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択される。

昭和五四（一九七九）年 黄綬褒章受章。

昭和五七（一九八二）年 三月三〇日、三六年ぶりの里帰り。母たちの墓前に参る。

昭和六一（一九八六）年 NHKラジオ「私とハルばあさん」放送（文化庁芸術祭芸術作品賞、放送文化基金賞受賞）。

平成七（一九九五）年 三条市の招きにより初の故郷での公演を行う。一三年ぶりに母の墓前に香を手向ける。

平成八（一九九六）年 初めてのCD『最後の瞽女 小林ハル九六歳の絶唱』制作。

平成一一（一九九九）年 五月「瞽女文化を顕彰する会」発足。同会主催により一〇月「小林ハル百歳を祝う会」が新潟市総合福祉会館で開催される。

平成一二（二〇〇〇）年 十一月五日、『瞽女文化顕彰碑』が「胎内やすらぎの家」の前庭に建立される。

平成一三（二〇〇一）年 三条市名誉市民に選ばれる。

平成一四（二〇〇二）年 第三六会吉川英治文化賞受賞。

平成一五（二〇〇三）年 写真集『聾女 小林ハル 一〇三歳の記録』刊行。

平成一七（二〇〇五）年 一月二四日、一〇五歳の誕生日を聾女仲間たちの祝福を受けて祝う。

四月二五日午前二時一五分、永眠。四月二七日葬儀、戒名「無量院春芳慈聲大姉」。八月一日、新たに建立された五輪塔墓に埋葬される。

令和一（二〇二〇）年 三月、映画『聾女 GONE』完成。全国上映開始。九月、美智子上皇后

へ献上、ご高覧を賜る。



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

川野楠己 (かわの くすみ)

1930（昭和5）年、東京に生まれる。元NHKチーフディレクター。90年、NHKを退職するまで視覚障害者向けの「盲人の時間」の企画制作を担当。その一方で、ラジオドキュメンタリー番組を制作。小林ハルの足跡をたどった「私とハルばあさん」は昭和61年度文化庁芸術祭・芸術作品賞文部大臣大賞、放送文化基金賞を受賞したほか芸術祭賞2度受賞。イタリア賞、日本賞の参加作品を制作したほか、「祈りと琵琶と～現代に生きる琵琶盲僧」など数多く番組を制作した。

退職後の主な表彰——1996年、厚生大臣表彰。2007年、第1回・塙保己一賞・貢献賞。08年、第5回・本間一夫賞。09年、平成21年度・社会貢献者表彰。14年、第51回・点字毎日賞。21年・ヘレンケラーサリバン賞受賞。

主な著書——『聞き書き、箏曲家・中塩幸祐伝』『琵琶盲僧 永田法順』『瞽女 キクイとハル』『きみに働ける喜びを』など多数。

CD『今を生きる琵琶盲僧の世界』『最後の瞽女 小林ハル～96歳の絶唱』を自費制作しリリース。

さいご 　ごぜ 　こぼやし 最後の瞽女 小林ハル

著者 かわのくすみ
川野楠己

初版発行 2022年2月14日

発行 ちじんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2021 Kusumi Kawano

『最後の瞽女』

小林ハル

96歳の絶唱』

— 無形文化財保持者 —



企画・制作・解説 川野楠己
後援 社会福祉法人愛光会
養護盲老人ホーム 胎内やすらぎの家

CD『最後の瞽女 小林ハル～96歳の絶唱』

定価：2000円＋税、送料別

購入をご希望のかたは、地人館HP (<http://chijinkan.com/>)
の「お問い合わせ」からお申し込みください。